

現代日本戲曲大系 6

現代日本 戯曲大系



6

現代日本戯曲大系 第六巻 定価三八〇〇円
一九七一年十一月三十日 第一版第一刷発行
一九七三年七月三十一日 第一版第二刷発行
編者 三一書房編集部

発行者 竹村 一

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台一の九

電話 東京(二九一)三二三一

振替 東京八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷所 第一印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

収録作品の上演については、必ず著者または
著作権継承者に了解を得て下さい。

現代日本戲曲大系／第六卷／目次

1963

パラジ——神々と豚々……………	今村昌平・長谷部慶次	七
新版四谷怪談……………	廣末保	三
明治の枢……………	宮本研	三

1964

消えた人……………	大橋喜一	一〇
冬の時代……………	木下順二	一五
わてらの年輪……………	渋谷天外	二〇
自由少年……………	田中千禾夫	二五
犬神……………	寺山修司	二八
袴垂れはどこだ……………	福田善之	三五

1965

冬眠まんざい……………	秋浜 悟史	三六
ジョン・シルバー……………	唐 十郎	三七
奢りの岬……………	人見嘉久彦	三八
サド侯爵夫人……………	三島由紀夫	三九
解説……………	津野海太郎	四七
解題・付作品一覧……………		四七
演劇略年表(1964～1966)……………		四七
装幀 坂口顕		

凡例

- 作品は初稿雑誌発表年月（但し活字発表のない作品は初演年月）を基準に、同年内では作者名の五十音順に配列した。なお、年号は西暦で示した。
- 作品は原則として新漢字新かなづかいにあらためた。
- 明らかな誤字・脱字は訂正したが、送りがな・表記の不統一は原文どおりにした。
- 文中の*および注番号は原文に従い、該当作品末尾に注釈として付した。
- 幕（場）数、登場人物・時・所の表記は原文どおりにした。

現代日本戲曲大系 第六卷

(1963~1965)

パ ラ ジ — 神々と豚々 — 二幕

今村 昌平
長谷部 慶次

登場人物
△東京▽

永田 立元 (50) 永田プレス社の社長・クラゲ

島出身

〃 シズ子 (28) その娘・出戻り

島出身

麓 金朝 (45) 永田プレスの職制・クラゲ

島出身

太^{ちやう} 亀太郎 (21) 永田プレスの工員・クラゲ

島出身

三 宅 永田プレスの工員・朝鮮人

〃

坂 口 〃

〃

井 上 〃

〃

山 内 〃

〃

桜 井 〃

〃

八 重子 (16) 永田家の女中・クラゲ島出身

身

平 徳里 (50) 永田の旧友・クラゲ島出身

東 光悌 (60) 都會議員・クラゲ島出身

現場監督

人 夫 数名

結婚式の客並に手伝い 数名

巡 査

永田プレスの工員 数名

△クラゲ島▽

太 マゴ (100) 亀太郎の曾祖母

〃 山盛 (80) 亀太郎の祖父

〃 根吉 (50) 亀太郎の父

〃 ウマ (45) 亀太郎の母

〃 清三 (20) 亀太郎の弟

〃 トリ子 (18) 亀太郎の妹・精神薄弱

〃 ナカ (45) 根吉の妹・ユタ (巫女)

〃 盛太 (38) 根吉の弟・三池帰

土持 嘉熙 (21) 清三の友人

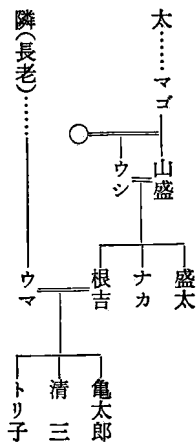
土持ウメ子 (18) その妹

平 ウト (47) 徳里の妻

若 い 衆 数名

大家のパラジ 数名

島の人々 数名



第一幕

第一場 永田プレス工場・倉庫 の表と中（東京）

幕開くと真暗な舞台。中央にスポットが当り鶏小舎の前に蹲み込んだ太亀太郎(21)が浮き上がる。左手の暗がりから、ひそやかに金属の触れ合う音、男たちの低い短い話声が時たま聞えてくる。

亀太郎 トウトウトウトウ……（手を巣箱の中に差入れる）チュッ、ぬが卵ば産さんかや、こいつ物ばっかり食うて……頼みゆつど、明日やふてえ卵よ、産さんばや首しむつどう……震えつとんどや。寒いのかよう。……よしよし。（段ボールで囲ってやる）

左手の暗がりから突然押し殺した様な男の声が掛かる。

山内 太……

亀太郎、のっそり立上がる。

山内 駄目じゃねえか、鶏なんかかまつてちゃ、見張つてろよ。ちゃんど。

亀太郎 ああ……

山内 役に立たねえ野郎だな、全く……

亀太郎また鶏小舎を覗く。

亀太郎 トウトウトウトウ……明日や太え卵よう産さんばや首しむつどう……

都電の音、裏の騒音が遠く聞える。

右手から永田立元(50)が来る。

亀太郎（大声で）あ、社長！ 社長さん！

暗がりの物音、全く静まる。

永田 下水が溢れとるぞ、また……

亀太郎 済みましえん。昨日竹の棒で突ついたら一遍は通つたのですが。

永田 平は来なかつたか、こつちへ。

亀太郎 いいえ。来ましえんでしたです。

永田 フーム、若し見たら僕の方へ来るように言うてくれ。

亀太郎 はい。

永田 ……（ジッと亀太郎の上衣を見詰めて）そのジャンパーは、お前のか。

亀太郎 はア……、この間、お嬢さんに頂きましたのです。

永田 ……ふーん。（氣を変えて）……根吉君は元氣か、お父さんは。

亀太郎 はア、元氣で居ります。昨日もクラゲから手紙が来ました。

永田 そうか。……

亀太郎 あの、手紙に書いてありましたです。……徳時のイサオが沖繩ぬ女子と結婚したちゆうて、……イサオ、知ってますでしよう。

社長のパラジですから。

永田 知らんな、そんな奴。

亀太郎 そうですか……でも、あのマツ子、牛に突かれて死んだマツ子の前の主人はイサオの叔父ですに。それからマツ子の上の姉は社長

のハトコですから、イサオと社長はパラジではないですか。

永田 ……僕は関係ないな。……（厭な顔をする）

亀太郎 でも、イサオとうちとはパラジになります。だからうちと社長んともパラジになりますですね。

永田 僕は軍隊も入れて二十年以上、故郷へ帰つたらんか、もう島のこととはまるで覚えがない。（去りかけて）平が来たら僕の方へ寄越しなさい。

右手から麓金朝(45)が来る。

麓金朝 あ、職制が見えたです。

麓（興奮して）社長、くろがね鉄工スト、妥結しよつたです。

永田（驚き）妥結?! ……スト終つたのか。

麓 ええ、……これでくろがねが仕事再開したら、本田鉄工の仕事は二十パーセントは、もつて行かるでしよう……

永田 それで、本田から、何か言うて来たか。

麓 いえ、しかし本田が仕事不足になれば、下請けの仕事はかなり引上げるに決ってます。

これ以上仕事が減つちゃ、銀行もうるそうなります。

永田 高橋さんは、どうした。

麓 今迄一緒だったのですが、くろがねのストが終つたと聞いたら、まるであんな、手の裏返しに借金催促でした。

永田 ……信用金庫の連中なんて、そんなもんじゃ……我々みたいな中小、手玉にとつてる

氣でいるんだから。

亀太郎 社長、大変なことになりましたですね。

麓 お前らが心配せんでもよろしい。(永田に)
それで、高橋さんに会うて欲しいんですが。

永田 ああ、仕様がないだらう。どこ？

麓 それが、上州屋ですが。

永田 ああ。

麓 ええと、(左手を見て)じゃ。

二人、左手へ行きかける。

亀太郎 裏門、鍵が毀れて開かんようになって
しもうて。

麓 そうか、明日から仕事が閑になるかもしれ
んが、戸締りは気をつけといてくれよ。

亀太郎 はい、大丈夫です。

二人、右手へ去る。

と同時に、亀太郎、左手奥に走り、暗がりに小
声で呼びかける。

亀太郎 三宅さん……坂口さん……社長も麓さ
んも帰ったですよ。

坂口、三宅、井上、山内、他二名がポツポツと
暗がりから現れる。

井上 (右手を見て) くらがねがスト中止だから
どうしたってんだよ。太……

亀太郎 また閑になるような話しとったです。
坂口 チェッ、本当かよ、運配分の給料、また
延びるんかよう。

一同、品物を左へ向って運び出す。亀太郎一人
傍観している。

井上 社長が馬鹿だから仕様がねえよなア。自
動車の型ア変るたんびにオシヤカ出してやが
んだからよ。

山内 太、あと鍵かっといてくれよ。

井上 泥棒が入るといけねえからな、へへへ！
一同左手に去る。

亀太郎 (咄く) 吾や知らんど、……どうなたん
てん知りやせんぞ。

亀太郎、鶏小舎の屋根に置いた洗濯物を取り、
はたき乍ら、倉庫へ入る。

▲幻燈 スクラップが黒く怪物のように重なり
合っている。F・I▼

亀太郎、扉に門をかけ、中二階に上つてゆく。
中二階は手摺がなく、替りに古びたロープが張
られ、「危険」と書いた紙片が下っている。汚
れた下着、作業ズボンなどがそのロープにかか
っている。

亀太郎、電灯をつける。

目の前に、平徳里(50)が蹲んで何か探している
のが見える。

亀太郎 あ、びっくりした。……平さん、何や
つとるんね。こんな処で。

平 (卑屈な笑いを浮べて) 居たのよ、マロ吉が
……

亀太郎 ……(疑わしそうに見る)

平 居たんですよ、中野に……火傷。ここに
(自分の後頭部を指す) こーんな大きいの。自転
車でね。フィルム罐あるだろ、丸いの、自転
車で運んでんだ。……道路工事やってたら
さ……ニコソんもういやだよ疲れちゃって。
貸してくんないかなア、亀ちゃん少しさア。
バジじゃないか、え、君も僕も同じクラゲ
島から出て来たんじゃないか。

亀太郎 ないよ、金なんか。それより平さんあ

んたここで何しとったんですか、ひとの留守
に。

平 それがね、亀ちゃん、今日ひよつと思つた
んだけどさ、マロ吉、何だかまだここに居る
ような……二年前と同じに、ここで寝てるよ
うな気がすんのよ。

亀太郎 平さん、ずっとここに居たんですか。
平 うん、居たよ。

亀太郎 誰か来よつたでしようが。

平 いや誰も来なかつたよ。

亀太郎 ……

平 あ、この枕、ああ、これ呉れないかな。僕
に。これ本当はマロ吉のなんだ。(枕をとる)

亀太郎 そんなこと！ 僕がお嬢さんに貰うた
んじや。

亀太郎、平の手から枕を奪い返す。平、柱にか
けた白いハンチングに手を伸ばし、

平 この帽子は……

亀太郎 それは社長に貰ったんじや。

平 だって、そのジャンパーだってマロ吉のだ
よ。亀ちゃん……

亀太郎 あつ、そうじや……社長が探しとった
平さんを。あんたが居たら来るようにつて。

平 そうかい……(喜んで) 永田君は親切だから
ねえ……。大事に勤めなさいよ。あんたも
……

平、門を開けて右手へ去る。

亀太郎、見送っているが、寝台から枕をとり上
げて見る。

亀太郎 ファン……マロ吉って奴、この枕で寝とったんか……

枕を放り出し、ちょっとジャンパーに触れてみる。

左手より永田シズ子(28)が来る。

倉庫へ入り、門をかけ、中二階へ上っていく。

亀太郎、ロープ越しにチラと見るが、知らぬ顔で洗濯物を干す。

シズ子 ああ、疲れた。川へ行って来たの、散歩に。

亀太郎 お嬢さん、もうここへ来ないって約束でしょうが。

シズ子 私、十歳の時、島から東京へ来たでしょう。よく川原で遊んだわ、一人で。川が珍らしくてね、島には川がないんだもの。

亀太郎、ズボンを取込んで調べる。

亀太郎 お嬢さん、誰にも見付からんで来たんですか、ここへ来るの。

シズ子 ええ、大丈夫、鍵もかけてきたわ。

亀太郎 困ったやア、このまま帰ってくりれ。

お嬢さん、若し社長に知れたらどう言われるか。

シズ子 平気よ。お父さんなんか。

亀太郎、針と糸を出して、破れたズボンを縫いはじめる。

シズ子 成城に居た時ねえ、あそこの近くの川へ時々行ったの。でも成城のお母さんうるさいのよ、凄く。あの人、本当は私を閉じこめて置きたいの、縁側の簾椅子でいつも小説読みながら、時間計ってるのよ、一寸お使いに

行っても、五分遅い、十分かかりすぎたって。亀太郎 お嬢さん……平さんに会わなかったですか、今。

シズ子 会わなかったわ、どうして。

亀太郎 平さん、ここに隠れとったんですよ。

シズ子 ここに？

亀太郎 僕の留守中にここへ這入って、何か探してるんです……

シズ子 そう……あの人、少し気が変なのよ。

亀太郎 社長さんが、平さんを探しとったようですよ。

シズ子 そう。

亀太郎 ああいつもいつもお金をせびりに来られては大変じゃア。

シズ子 昔の友だちだから仕様がなんでしょう。

亀太郎 僕は、このジャンパー誰に貰うたかちうて、社長に聞かれました……

シズ子 それで。

亀太郎 お嬢さんについて言うたら、厭な顔されました。これ、マロ吉さんが着とったんですよ。

シズ子 そう。

亀太郎 しかし、どうして社長がそれを……

シズ子 (突然足を亀太郎の前に突き出す) 靴、脱がして。

亀太郎 ……

亀太郎、シズ子の靴を脱がせ、寝台の下に置く。シズ子、亀太郎を捉まえ、接吻する。

亀太郎 お嬢さん……止めてくりれ……若し社長に知れたら……

シズ子 かまわない。

亀太郎 お嬢さんがかまわなくとも、こっちはかまいます。

シズ子、更に接吻する。

亀太郎 お嬢さん、この間、もう止すって……

シズ子 嘘！ 私、止さない……

亀太郎 こんなこといつまでもしとったら……不幸せになりますと。

シズ子 かまわない……不幸せならもうずっと前からよ。

亀太郎 で……でも、僕は、実は……

シズ子、亀太郎の唇を吸う。亀太郎、ダラリと両手を下けている。

シズ子 (唇を離す) 何よ、実は……

亀太郎 ……実は……手紙が故郷から来よって……いや、こんな事よします、変だから……

シズ子 何が、変なの……

亀太郎 笑いますよ、きつと、お嬢さん。

シズ子 何よ、言いかけて……言って……言なさい、笑わないから……

亀太郎 僕の家には昔から石の神様があるので、今度豚が病気になったちゅうんで……お伺いを立てたんだそうです。すると、太の家のものは、ここ暫く女子を断たねば豚癒らんちゅうもんで……

シズ子 ……(笑う)……

亀太郎 (怒りを含み) ……だから話すの厭だっ

て言ったんで、それが迷信でも当る時のあるんです。僕の家は実際石の神に祟られているようなもんで……

シズ子 あんたのお祖父さんのこと。

亀太郎 え?!

亀太郎 硬直してシズ子の傍を離れる。

シズ子 そんなこと気にするなんて、変だわ亀ちゃん……お祖父さんがどんなことしたって、あんたには何の関係もないでしょ。

亀太郎 誰から聞いたのですか……八重ちゃんからですか。

シズ子 誰からだっていいじゃないの、そんなこと。太家の人間はケモノだって言うんでしょ、クラゲじヤア。

亀太郎 (唇を噛む)

シズ子 面白いじゃない、ケモノだなんてさ。

亀太郎 面白くありません。家の者は皆、そんな事言われて苦しんで来ましたです。

シズ子 私面白いな、でも……

亀太郎 お嬢さん……面白いちゅうけど、お嬢さんだってやっぱりケモノでしょうが。

シズ子 ケモノ? ……何故私がケモノなの。

亀太郎 止めるって、約束して、またここへ来るるじゃないですか。

シズ子 ……

亀太郎 (口を歪める) あんたはここへ僕と寝に来られたのでしょうか。

シズ子 ……

亀太郎 この豚小舎みたいな倉庫の中の、こん

な汚い寝台の上で……

シズ子 やめなさい。

亀太郎 僕みたいなケダモノに抱かれて……ケモノのように泣きたいのでしょうが……

シズ子 お止め、お止めたら……

シズ子 亀太郎に打ちかかる。

亀太郎、シズ子の胸を一突きする。シズ子、寝台に倒れる。

亀太郎、やがてジャンパーを脱ぎ、そつと俯伏

せているシズ子に近寄る。

シズ子 ……亀ちゃん……

亀太郎、ジャンパーを床に叩きつける。

ユタの祈りの声が流れてくる。

亀太郎、やや上方を見上げ、目を固くつむり首を振る——

△幻燈 檻の中で寝ている豚たちの俯瞰 F・I▽

やがて、亀太郎、飛び掛るように寝台のシズ子に被さり、抱き締め強く接吻する。

シズ子 ……いいの、大丈夫? 豚の病氣……

平の声 ……亀ちゃん……太クーン……

亀太郎とシズ子、はつとして半身を起しきき耳を立てる。

亀太郎 鍵、かけて来たですか?

シズ子 ええ?

平の声 太クーン……亀太郎クーン……マロ吉

がいたんだよう……マロ吉が生きていたんだよう……

ユタの祈りの声が次第に昂まる。

——暗転——

第二場 太家(クラゲ島)

△幻燈 青緑色の海に囲まれた明るいクラゲ島の俯瞰 F・I▽

強い日光に、白く輝くように見える太家の庭先。

白衣を羽織ったユタ(巫女)のナカ(45)が左手にある等身大の石に祈りを上げている。山盛(80)がその後に控え、背広を着た盛太(38)が縁先に腰を掛けて煙草を吸っている。

ナカ ……とうとがなし、とうとがなし……

(祈り) ……太ぬ家におきましては豚を飼って居りますけれど、この飼って居ります養い

物に色々の祟り障りが現れて居りますけれど、家内の不祥せというものではござりましたえぬ

でしょうか……

薄暗い家の奥に子供のように小さいマゴ(100)が

ポツンと坐っているのが見える。豚の声、遠く

波の音。

ナカ (石に向ったまま) ジャアジャ……

山盛 (頭を上げて) ああ?

ナカ 豚ぬ病氣やいつからじゃ。

山盛 ええと……先月の……

盛太 二十日頃じゃろう。

ナカ 先月の二十日頃より祟りが現れております……(祈り収めて立上る)……ハグエは! 恐

ろしや恐ろしや……石ぬ神様の罰やタチバチ

じゃア。

右手奥より刈草を頭上に載せたウマ(45)が帰つて来る。

ウマ あげえ……ナカさん、来てくりていたん

かやア……ちよつとも知らんむんでえ……こりやア、盛太さんも……

ナカ 嫂さん、亀太郎に手紙ば出したんな。

ウマ へえ出しもうしたが、……

ナカ 亀の奴東京で何かやつとりやせんかやアウマ へえ、よく書いてやつたんで、お告げば守ってるち思いますかのう……

ナカ ま、亀の奴は未だ雛ッ子じや、女子に触りたがつたとて無理はないのじや。じやが根吉の穴掘りは許せん。石ぬ神様がよう、何事も自然に逆らつてはならんと、あるがままにしなければいいのじやと。

ウマ トリ子アどうしたかやア、トリ子、トリ子ウ……

ウマ、スツと家の蔭へ去る。

ナカ 部屋に上り、神棚の前に行き乍ら、

ナカ この家の主にや三年前から魂ぬ取り憑いて離れんのじやむん。津波ば起して田圃に石ば上げなすつたのは、石の神様ぬ御心じやちゆうて、いくら説いても分らん男じやむん。(手を合せる)

山盛 (手を合せ乍ら咬く) 根吉や極道じや罰当りじや。

ナカ、折り収めて白衣を脱ぎ、盛太に抛る。盛太、それを疊んで風呂敷に包む。

ナカ ジャアジャ、(と向き直つて) 汝もえらい弱気になったもんじやな。昔ぬジャアジャなら打ち倒しても根吉兄ぬ穴掘りくらい止むらしたんじやろうがやア。

山盛 なあに……今でも……負けやせんに……ナカ ジャアジャ、実は吾に西ぬ畑五畝だけ分けて貰いたいのじやが。

山盛 ……

ナカ あの畑ア、元々吾が東光悌と一緒にたつた時、ジャアジャに貰う筈の持参畑じやつたの。

山盛 ……うん、昔の話じやが……けえど今頃んなつてから、どうして……

盛太 新憲法ではよ、ジャアジャ、根吉兄とナカ姉と俺と兄弟三人で財産は均分するちゆうことになつてゐるんだぜ。ところが俺が大牟田から帰つて来ても、根吉兄もジャアジャも知らぬ顔じや、俺ア居る処もないけん仕方の方ナカ姉ん処へ転がり込んだるがよ、いくらユタ神様ア現金収入があるちゆうても大の男が居候は聞えもよくないしのう。

山盛 ……うむ……

盛太 ナカ姉も氣い遣うて、それじやア、持参畑を返して貰うちゆうことで話してみようと言うてくれてな。

ナカ 盛太アいづれ博多あたりに小店でも持ちたいちゆう話じやが……なかなか銭ぬかかりゆんでやア。

山盛 ……うむ。

トリ子の泣き喚く声。

根吉(50)が右手奥からシューミーズ一枚のトリ子(18)を抱えるようにして引きずって来る。

▲幻燈 F・O▼

根吉 ウマ!

トリ子 アチャ、アチャ、痛い、痛いよう……

アーマ、アーマ。(足をばたつかせる)

根吉 ウマ!

根吉、庭先にトリ子を放り出す。

根吉 ウマ!

山盛 (縁先に立つ) 根吉、トリ子が何ばした。

無下に痛めてはならんど。……

根吉 トリ子は吾ぬ子じや。

ウマ、膳を持って奥から出て来る。

根吉 ウマ、トリ子は裸にして島中見世物にする気か……

ウマ 吾が知らん間に出て行きよつたんじや。

根吉 着物着せろ、早く……

山盛 トリ子……痛い、どこが痛い?

トリ子の背に手を置いて労わろうとする山盛。

根吉 余計なことすんな、ジャアジャ。ウマがやる。

ウマ、トリ子を奥へ連れ去る。山盛、胸を掻き乍ら縁側に戻る。

モッコとロープを担いだ清三(20)が汗と泥にまみれ、疲れ切つた姿で右手奥から現れる。庭先に担いだものを放り出し、物も言わず奥の縁に大きな音をたててブツ倒れ、太い吐息をつく。

どうした、清三……

ナカ さアて、行くか、(と盛太を促し、立上つて)

兄さん、豚の病氣ややつぱり穴掘りぬせいじや。

根吉 ……

ナカ 汝も石ぬ神様の祟りが恐かつたら、ええ

加減百姓らしゅう畑仕事ち氣づることじやな。

ナカ、庭へ降りる。盛太も続く。

ナカ、庭先の石に一礼する。

ウマ (膳を持って出て来て) ハグエー、今アチャがお相手するに、一緒に夕飯食べてたばうれや……

山盛 ナカ、食うていかんか、久し振りじや。

ナカ 吾や神様にお仕えしゅん身じや、神様に逆らうちゅん家じや飯や食えんの……とうとう、とうとがなし……

ナカ、盛太と共に左手へ去る。

トリ子、膳を運んで来る。

ウマ (マゴに) マゴ婆あよ、今日は昔のような

蘇鉄団子作ったよ。食べてたばうれ。

ウマとトリ子、マゴを左右から抱えて膳に坐らせる。

根吉 清三! 飯じや。

清三 …… (起きない)

根吉 早く喰わんか、清! 今夜も夜なべじや、食わにゃ続かんぞ。

清三、飛び起きて、根吉を睨む。

清三 明日から製糖工場ぬ又始まるんじや、夜中まで穴掘りのつき合いが出来るかや。

根吉 …… (団子を頬張る)

清三 ……これじやまるで百年も昔と同じじや、蘇鉄団子喰うて朝から夜中迄、意味もない穴掘りなんぞさせられて……

山盛 清、親に向つてそんな口きくな。

清三 俺アもう厭じや。俺ア奴隷じやないんだ。山盛 清!

根吉 ジャアジャ、放つとけ。ちいっと頭へ上つとるだけじや、すぐ収まる。

土持 清三(21)とその妹ウメ子(18)が左手奥から来る。

土持 清三、遅くなるぞ。

清三 ……(根吉を睨んだまま)おう、すぐ行く。

清三、バツと右手に走り込む。

ウマ、マゴの口に団子を少しづつ運んでやっている。

山盛 (土持に) グスクの女童ぬ処か?

土持 夜遊びじやねん。農業研修んの先生が来たんでな、青年団で講習会やる打合せよ。

根吉 津波が来ても倒れんような稲の事でも習うとけや。

土持 津波じや仕方ねんが、日照りに強い稲と黍の改良種があるつて言うからの。そのことば聞こうかと思つてな。

根吉 まあ、酔つ払わんうちに聞いちようけ。

山盛 ウメ子はいくつになつたかやア。

ウメ子 十八じや。

山盛 死んだアチャにより似てきたのう。

ウメ子 そうかやア。

土持 そうじや、来月うちで屋根葺かんならんのじやが、ユイタバ頼みゆんど。

山盛 ほう、そうか。この家ぬ屋根葺いたのが十五年前じやつたからのう。あん時にや汝とこぬアチャも三人ばかり連れて来ちくりてよ……ほう、そうか。借りたむん返さんばなら

ん。ユイタバにやきつと行つてやるからのう。

土持 頼みゆんど。

清三、着替えて出て来る。

清三 行こう。

清三、土持、ウメ子、左手へ去る。

波の音、蛇皮線の音が聞える。

舞台、薄暗くなる。

▲幻燈 白膚のやもりがくの字なりに柱にくっついてゐる F・I・V

「チ、チ、チ……」とやもりの鳴く声。蛇皮線の曲で男声の「島うた」が聞こえそれが次第に大きくなる。トリ子、暗がりの家から走り出て、四辺を窺う。

男声の歌 ……田美留ぬ畦踏みや稲穂ゆらゆらゆら ……トリ子ぬお乳も押せばゆらゆらしゅんほど育つたよ。

トリ子の反歌 ……今年作つた米やしし玉のようなん実りの……やいすりしし玉ゆらゆらゆら ……サイサイ……

左手、石垣の蔭から四、五人の若者の頭が覗く。

蛇皮線と歌は続いている。

ウマが膳を下げ、ランブをつける。

根吉、山盛、マゴ、歌を聞いている。

ウマ (嬉しそうに) トリ子にも男衆ぬ夜遊びに来てくるわ。

根吉 なんの……奴等ア冷かしじや……

山盛 トリ子ア死んだウシによう似とる……ウシぬところにも若い衆が毎晩遊び来とつたわ……お前たち、夜遊びに来たんなら、家ん中

ち這入ったらしいじゃろう……

庭で、トリ子、歌に合せて踊り乍ら着物の裾を捲りシユミーズのレースをちらちら見せている。

男A トリ子、綺麗さやア、もつと見しええ。

トリ子裾を次第に捲つてゆく。

蛇皮縁がギターになり、曲はいつしかジャズ調の流行歌に変わっている。

男B 上手じゃが、トリ子、もつと捲れやアもつと……

男C 裸になって見しええ、トリ子……

男A トリ子やア。

トリ子 (踊り乍ら) 何じゃ。

男A ……トリ子は誰ぬ嬢じゃ。

男B ジャアジャぬ嬢じゃよう。(笑う)

トリ子 ジャアジャぬ嬢じゃ。

男C 違ふ違ふ。トリ子や根吉ぬ嬢じゃ、根吉ぬ。

トリ子 根吉ぬ嬢じゃ。(大笑いになる)

根吉 庭先にいきなり飛び出し、慌てて逃げる男Aを捉え、撲り倒す。

若者達奇声をあげて逃げる。

トリ子 (喚く) アチャ! 馬鹿! アチャ!

馬鹿!

若者達の野次声「ケダモノ! ケダモノ! 親子丼……」

トリ子、地に身体を投げて悶え泣き喚く。

山盛、縁先に出て来る。

山盛 トリ子! トリ子!

根吉 馬鹿たれが。あがら者、相手にすんな馬鹿にさりゆんが落ちじゃ……

トリ子 アチャ、かゆい……かゆい……耳い。

根吉 ……?!

トリ子 かゆい……掻いてたばうれ……耳掻いてたばうれやア……

根吉 耳?!

トリ子 耳じゃア、耳掻いて……

根吉 ……ここかあ?

根吉 トリ子の耳を掻く。

トリ子 うん。

根吉 トリ子、かつしゅんこと、誰に教わつたとか?

トリ子 ……ジャアジャ。

根吉 ジャアジャ?!

山盛 トリ子アよう……

根吉 山盛を見る。

山盛 ……トリ子ア何の楽しみもねんからよう。

山盛 顔を背けて中に入る。

トリ子 アチャ……もつと……もつと……

根吉 トリ子の耳を掻き続ける。

——暗転——

第三場 穴(クラゲ島)

紗幕の奥に巨大な縦穴の断面、梯子と土運びのモッコが降されてある。

上の方に人が通れる程の道がある。

▲幻燈 ガジュマルの大樹が青い空に聳えている F・I

根吉 鶴嘴で掘っている。清三、面白くもない顔でモッコを穴底に降す。根吉、鍬で土を入れ

清三を見上げ、「おう」と叫ぶ。清三、荒い息

を吐き乍らモッコを引上げる。前に上げたモッコと天秤にして渾身の力で担ぎ、左手に去る。すぐ右手から平ウツ(47)来る。清三を見送り、穴の縁から覗く。

ウツ (小声で) 根吉……根吉……

根吉、チラとウツを仰ぐが、かわらず掘り続ける。

ウツ 昨夜、マロ吉ぬ夢見たんじゃ、マロ吉がよう、東京でひどい目に遭うとるんじやないかと思うてよう。

根吉 銭か、又。

ウツ うん、いつも悪いが……少し……

根吉 銭やねん。(掘る)

ウツ ……困つたやア。……じゃア……顔だけ

でも見しえてくれらんかやア……

根吉 ……(掘り続ける)

ウツ 吾や心配なんじや……

根吉 何が心配じゃ……

ウツ 皆がよ、この穴の為に水が良う出んよう

になつたちゆうて……

根吉 馬鹿ア吐かしえ。

ウツ あんまり皆ぬそ言うからやア、悪いことにならんばいいと思うとるんよう……

盛太 二人の話中に穴の傍に来て見ている。

盛太 兄、お安くないのう、穴の中で浮気とは

……

ウツ、小さくなつて盛太を盗み見て根吉に、

ウツ じゃ、頼みます……

ウツ、右手に去る。根吉、掘る手を止めない。

盛太 こつちはユタ神様の居候じゃ、浮気しよ